

山びこ通信

しぜん²⁻⁴ イタリア語¹³ ラテン語^{15,19} ウェブプログラミング ロシア語¹³
歴史²⁰ ギリシャ語^{16,17} かが⁶ ユークリッド幾何 フランス語¹⁴ 数学^{9,10}
ことば^{7,9} つくる^{4,5} 漢文 かず⁸⁻⁹ ドイツ語 イベント 将棋道場¹⁸ 英語¹¹
ロボット工作¹⁷ 山の学校ゼミ(社会¹²/数学/調査研究⁹/法律/生活と文化/倫理⁹)

素読と子どもたち

山の学校代表 山下 太郎

私は山の学校で「論語」の素読を担当しています(月に一回、小学生対象)。やり方は幼稚園で行なっている俳句と同じです(週に二回、年長児対象)。どちらも正座をして挨拶し、黙想するところから始まります。俳句は五、七、五の切れ目まで、一方、「論語」は切りのよいところまで私が先に言葉を発し、子どもたちがそれを復唱します。

「論語」の素読は今も草の根レベルで行われていると思われませんが、幼児を対象とした俳句の素読はおそらく全国的にもまれだと思います。これは幼稚園の創設当初に祖父の発案で始まったものです。「幼児と俳句」と題したエッセイ(『この道50年』所収)の中で、父が祖父の心中を次のように伝えています。

「俳句なら短かくて覚えやすいし、文学的なリズム感もある。就学前の準備教育とは違い、早くから知っていたからといって入学後の学習の妨げにもなるまい。幼児期にこそ、日本古来の最短詩である俳句を通して、知育よりもむしろ詩ごころの根っこを育ててやりたい」。

昔と今と、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しましたが、今の子どもたちが、俳句や「論語」といった伝統に根ざした「大人の言葉」、「本物の言葉」を渴望していることは実践して初めてわかります。素読とままでいなくても、家族で百人一首をすれば、読み手となる大人は誰もがこのことを実感するのではないでしょう。

さて、山の学校の「論語」では、私は本来の素読を離れ、子どもたちにいろいろな問いを出すようにしています。例えば、「徳孤ならず。必ず隣あり」を紹介した後、「この『とく』とはどんな漢字かな?」といった具合に。下の学年から尋ねていくと、ある生徒は「得」、別の生徒は「特」と答え、最後に上級生が「道徳の徳」と答えてくれます。

知識の確認をするためというよりも、こうしたやりとりそのものを大事にしたいと思い、私はできるだけ子どもたちにとって身近な話題を取り上げ、対話(問いと答え)の時間をもつようにしています。「論語」にかぎらず中国古典の魅力は、一字一句、一文一文が多様な解釈を許容する点にあります。すでに知っていると思っ

ている言葉も、観点を変えて問い直すと面白い発見があります。子どもたちの反応を見ていると、ある程度わかりやすい言葉とそうでない言葉があります。「利によりて行えば怨(うら)み多し」や「君子は義に喩(さと)り、小人は利に喩る」などは、内容を説明すると低学年の子どもたちも「なるほど」という顔をします。逆に「君子は器(き)ならず」は、「器」でいけない理由を子どもに伝えるのは難しく、また、「巧言令色すくなし仁」も、説明に手こずる言葉です。もちろん、素読ということでは、言葉を尽くして理解してもらうことが目的ではありません。

昨年の某日。この日は許可を得て幼稚園の年長児が参加していたこともあり、基本に戻って冒頭の言葉のみを扱うことにしました。

子曰く(しのたまわく)、学びてしこうして時に之(これ)を習う、また説(よろこ)ばしからずや。朋(とも)遠方より来たる有り、また楽しからずや。人知らずして慍(うら)みず、また君子ならずや。

〈▶巻末へ続く〉

『しぜん』 (A・B1・C1) 担当 梁川 健哲

【秘密基地づくり】

もう私が何も言わずとも、生徒たちはショベルや熊手を手分けして担ぎ、道々よさそうな木の枝などを見つけたら引きずってでも運んで行くようになりました。そんな後ろ姿を「頼もしくなったなあ」と眺めながら、私も道具類を背負って後を追いかけます。目指すは森の奥、「秘密の場所」です。



A クラス

秋から始めた「秘密基地」作りも佳境を迎えています。試行錯誤を経て「壁」や「屋根」が次第に立ち現れ、随分と輪郭が見えてきました。きっと、それまで見えなかったものが、次々と見えてくるのが嬉しく、手応えも感じているのでしょ、みんなの行動力とワクワク感が加速度的に高まっていくのを肌で感じながら、私も夢中で手伝います。

木の枝を組んで、「壁」の密度が増えていくに従って「ここが入り口で、こっちが秘密の入り口ね!」「ここは塞がないで窓にしておかない?」というように、動線が以前より意識されたり、新しいアイデアが生まれたりします。入り口が坂になっていて出入りがしにくかったので、「階段」も作りしました。スコップを突き立てると、地表近くまでびっしり細かい木の根がいき渡っており、固くて大変なことに気づきます。根っこの格闘が続きます。

朝からずっと薄暗く、灰色の空だったある日、突然、基地の眼下に広がる斜面全体が眩いピンク色に染まりました。夕焼けが雲間から差し込み、一面に積もった落ち葉を光らせたのです。「わあ…」みんな、作業の手をとめて、しぜんと光の中に駆け降りていき、暫く佇んでいました。

「あ、こんなところにいいのがあったぞ!」大きな枝を、今度は足をずるずる滑らせながらみんなで運び上げます。山道のある尾根側からは出来るだけ見つからぬように作っていた基地ですが、人気の無い谷側から見上げてみると、そこには庵のような佇まいがありました。みんなそれを感嘆して眺めたり、時々尻餅をついて大笑いしたり…。そんな忘れたい瞬間がいくつもあります。

B1 クラス

Bクラスのみんなは冬になって「秘密基地作り」に心が決まりました。出かけると、山道から脇に降りた所に程よく木々で隠れている場所を見つけ、即座に全員賛成。早速作り始めます。

そこで人気なのは、根元から細かく枝分かれして広がっている小高い木です。登りやすく、3人くらいが同時に、いつまでも枝の中に抱かれている光景をよく目にします。「望遠鏡みたいでしょ。」切った竹を高い場所にぶら下げ、通りを監視するように覗き込んでみせるT君。Sちゃんも木の枝をぶら下げて竹を打ち鳴らす仕掛けを作りました。AちゃんとRちゃんは協力して木の枝の上に竹をくくりつけ、ベンチを作りました。M君は通りから目隠しになるように、壁作りを頑張っています。他にも、「郵便受けを作る!」「落とし穴作れないかなあ」「紐に引っ掛かると『カラncラン』と音が鳴る仕掛けを作ろうよ!」などとアイデアを口にしては手を動かしています。

このように、個性の異なる5人はそれぞれに空想を膨らませながら作業していますが、「サバイバルに行こうよ」という誰かの言い出した合図で一斉に材料集めに転向したり、協力し合ったりする場面が増えて来て、一年経って随分と絆が強まって来たように感じます。それぞれの世界観がどのように融合し、「特別な場所」になっていくのでしょうか。

山や木々に愛着を抱き、仲間達との絆を深める時間…。秘密基地作りの中に、多くの意味や学びが隠されていると実感する日々です。



【葉っぱ図鑑】

C1 クラス

「何か発表がある人は？」と尋ねると、競い合うように全員が「ハイッ！ハイッ！」と手をあげます。いつものクラスの始まりの風景です。絵日記を読み上げる他、最近ではクイズを出題するのが流行っています。「ヤマガラの鳴き声は何というでしょう？」「コアラの赤ちゃんの大きさはどのくらいでしょう？」といったように。みんなで考えて、答えが発表された後も、すかさず質問や関連クイズが飛び交います。「カラスは恐い鳥なのかな？」「太陽は何色なのかな？」など、難しい議論に発展することもしばしばです。

秋から始まった「葉っぱ図鑑」作りは、ゆっくりとしたペースで進んでいます。各自が拾い集めて押し葉にしておいた葉っぱと、その葉っぱについて感じたこと、手触りや匂いなどの特徴を書き込んだメモを一枚ずつセットにして、ラミネートで標本にしていきます。全部できたら、最後にどのように分類して並べるかという作業が待っています。ラミネートの良さは、その際に扱いやすく、保存も利くところですが、分厚い葉っぱの場合や、図鑑を見る人に実際の手触りや匂いを伝えたい場合にはどうするか、みんなに考えてもらっているところです。

標本づくりの前に必ず「今日も少しだけ拾いに行こうよ」という声があり、明るいうちに散策に出掛けます。小鳥についての話題が最近多かったからか、「鳥の声を集める」と言って紙と鉛筆を手に耳を澄まして鳴き声を書き留める人もいます。山の上は今ちょうど、あちらこちらで木の実がなり、鳥達が賑やかです。その中をゆっくり歩き回りながら、私たちも木の実を拾ってみたり、足元に積もった枯れ葉を拾い上げ、面白い形の虫食いを探したり、時々足を止めて耳を澄ましたりします。静かに自然と向き合い、仲間と対話することができる、みんなの感性を素晴らしく思います。

それぞれのクラスならではの雰囲気や時間の流れに寄り添いながら、これからもみんなの活動を見守ってまいります。



『しぜん』(B2・C2)

担当 小坂 諒

B2 クラス



このクラスは、その日に何をするか決めないまま山の学校を出発することが多いです。歩きながら「最近、秘密基地に行かないから今日は修理しよう」と言って山に行くのですが、大きな倒木を見つけて、登ったりロープを掛けてぶら下がってみたりしていると、あっという間に90分が過ぎていきます。結局、やろうと言ったことは何もやっていないけれど、「今日もたくさん遊んだなー」という感じでその日の授業が終わり、そんなクラスです。

ノコギリや鉋、スコップ、ロープ、麻紐など生徒さん達の思いつきに応えるための道具は出来るだけ持って行きます。また、「〇〇があったら〇〇ができるよ！」と、どんどん新しいアイデアを出してくれるので、毎回のように新しい道具が増えていきます。

隔週の授業なので、今の季節は行くたびに山の様子が変わっています。いつもは素通りしていた場所で急に新しい遊びを始める生徒さん達の様子を見てみると、寧ろ私の方が多くのことを学ばせてもらっているなと感じます。



秋学期は崖を這い上がって滑って遊ぶのが恒例になっていたのですが、その崖を登りきったところに偶然開けた場所がありました。今学期からは、その場所がみんなのお気に入りの場所です。全員集まったらすぐに山の学校を出発して、沢沿いに走り、何か見つけては止まって、また走ってを繰り返しながら崖の下まで行き、私が先に登りロープを木にくくりつけて、みんなが登ってきてから、「今日は何をするの?」といった感じで授業が始まります。実は、わざわざ崖をよじ登らなくても辿り着ける道があるのですが、ロープを頼りにして登った先にお気に入りの場所があるというのは、大人でもワクワクしてしまうもので、ちょっと重いですがロープは毎回必需品です。

隠れた場所ということもあって秘密基地を作っているのですが、慣れないノコギリに苦戦して、木を切るだけでその日の授業が終わってしまうこともあります。また、秘密基地作りは全然進まなくても、焚火をしたり、焼き芋を食べたりして、90分という限られた時間で出来る様々なことで自然と遊んでいます。

1年を振り返ってみると、この授業は大人の私にとってこそ自然と触れる貴重な機会でした。先生という立場だけではなく、一緒に山で遊ぶ仲間として生徒さん達と触れ合うことで、お互いに自然を存分に満喫することができる非常に楽しい授業でした。



『つくる』(5~6年)

担当 福西亮馬



冬学期は、弓矢や竹笛といった素朴な工作をしました。カッターナイフやのこぎりをよく使いました。生徒たちはそれまでの蓄積に自信があり、自分なりの見通しとそれを実現させるだけの技術とを両方持っています。工作が好きなおことで、それぞれがいい顔してくれています。「好きこそもの上手なれ」とは言いますが、生徒たちがそれを地で行ってくれていることを、ありがたいことだと思っています。

工作に限らず、大人が黙っていても生徒が一生懸命になれることがあるならば、それは当人のかけがえのない長所だと思います。加えて、人の興味というものには連続性があります。その連続性のおかげで、一つ分野でコツをつかむと、自然とその周囲の分野でもコツをつかみやすくなります。それがさらに周囲へと影響します。

同じエネルギーを使うならば、ある種の勇気を持って、好きなことに使う方が、結局は生徒もそれを見守る側もエネルギーの無駄遣いにならないですみます。苦手分野を克服したいという観点からは、「好きこそもの」とは同時に「急がば回れ」ということなのだろうと思います。

一年を振り返ってみると、秋学期に市販のボクシング・ロボットを作ってみてみんなで対戦したことが一番楽しかったようでした。それを無線化する希望も出ていました。もしその要望が強ければ、残りの回はその実現に向けた取り組みをしたいと思っています。もしそうでなければ、竹を火であぶって竹とんぼを作ったり、藁を編んでわらじを作ったりというレトロなことも考えています。いずれにせよ、面白そうだと思ってくれたことにチャレンジして、しめくりたいと思います。



1～2年

山の学校は一般の家庭なら捨てられれしまうようなものも沢山取ってあるので、生徒さんの「これくらいの箱があったら...」といったアイデアにも柔軟に対応でき、家でよく見るものが工作に使えるという発見もできます。

そういう身近な材料で作りたいものを作るには、やはり使い慣れたハサミだけでは限度がありカッターも使わないといけません。もちろん毎回のように慣れないカッターに大苦戦しています。「そっと同じところを切れば綺麗に切れるよ」と助言しても、かたくなに1回で力を込めて切ろうとするのでボロボロのパーツが出来上がって、頭をかしげている光景をよく目にします。でも本人達は切れたことに大満足です。ダンボールに書いた線の通りに、自分の必要だと思ったパーツが手に入るのは新しい経験なのでしょう。

このクラスは、普通のカッターだけでなくサークルカッターやホットボンドなど、初めて見る道具を使ってみて、そこから作りたいものを決めることが多いです。具体的に作りたいものは無いけれど、この道具を使ったらこんなパーツができた、これは面白いぞという経験は大切だと思います。その積み重ねでアイデアが浮かんでくるのではないのでしょうか。どんな道具で、どんな加工ができるのかという知識の量と自分の作りたいものの量は比例しているんじゃないかなと、1年間この授業を担当して強く感じました。



2～4年

秋学期と同じで、このクラスでは授業前半は山の学校で工作して後半はプレイルームで遊ぶことがほとんどです。工作好きの生徒さんが集まっているので、私が何か用意していても「今日は〇〇を作ろう!」と作りたいものを決めて来てくれることが多いので、それを山の学校にある材料でどうやって作るか考えるところから授業がスタートします。

とある日の授業ではスターウォーズで世間が盛り上がっていたこともあって、生徒さんたちは来るやいなや「今日はライトセーバーをつくる!」というので、みんなでライトセーバーの画像をインターネットで探して、それを見ながらライトセーバーを作りました。「黒いテープある?」「ここをもっと硬くしないと!」など、どんなアイデアを出しながら作っていきました。私は先生というより、材料をとってきて作る際のヒントを出すという、みんなの補助的なポジションでした。そして、もちろん斬られ役のポジションでした。

そんな感じの授業なので、最近は何を作るかは生徒さんに委ねています。みんなの作りたいものがバラバラになることもあります。そのときはそれぞれが自分の作りたいものを作ります。剣と盾をつくる生徒さんもいれば飛行機を作る生徒さんもいます。完成が近づいてくると、他の作品を見て「次の授業はこれを作りたい」とお互いに刺激しあうこともあり、私も見ていて新鮮です。残りの授業もみんなの補助に徹します。



現在は A、B 両クラスとも、各自がそれぞれ設定した自由課題を探究しています。みんなが黙々とぼらぼらのことをしているようで、それとなく刺激を与え合い、影響し合っている面もあります。冬学期の制作はいつも、その一年間の締めくくりとなる記念作品を作るような気持ちで、たっぷり時間をかけて行っています。

3月後半には、一年間の作品達が一堂に会する「かいがクラス作品展」を開かせて頂く予定です。作品の見栄えやよし悪しを気にかけるより、今のみんなにとっては道のり—そこに至る試行錯誤や、何かに思いを馳せている時間こそが大切だ、というのがクラスの信念ですので、是非、以下にご紹介するそれぞれのストーリーと併せてご覧頂けたら幸いです。

A クラス

Ka 君は歴史の史料を紐解きながら、自作の架空歴史小説を書き、S 君は学校の教科書に出てくるお話にアレンジを加えながら漫画化しています。

恐竜画に幾つか取り組んでいた Ken 君は、S 君の漫画に感化され、初挑戦。その後、また恐竜に戻りましたが、今度は新聞紙を使った立体作品に挑戦です。

Ko ちゃんは自作の絵本を完成させたのち、また風景画や静物画の探求を始めました。絵本には続編があるらしいので、これもまた楽しみです。



B クラス

秋学期に貼り絵の課題をした流れで、引き続きその手法を用いながら制作をしている生徒がいます。マーブリングで作った模様の紙を絵の一部に貼り込んだ作品や、それを立体紙工作に用いる人、細やかな作品に独自の世界観を詰め込む人。

それとは対極的に押し固めた新聞紙で天井まで届くようなタワーを作ろうと挑む人、机二つ分もある大きな画用紙に大好きなインコを描く人、絵の具やマーカーで色彩豊かな空想画を次々と描く人…。



静かな熱気に満ちた部屋の中のあちらこちらで同時進行に色々なことが起こっています。まさに「ライブ」です。作品という「軌跡」の中に、このライブを想う時、その見え方は全く違って来るように思います。

また、現在はこのような色々な画材を用意し、各自の要望に対応できるようにしていますが、クラスでは時に、全く逆の課題も出します。例えるなら、「鉛筆一本と紙だけで、どこまで表現の幅を追求出来るか」といったように。

ですから、「あれが無いとできない」と言うのではなく、チャレンジする心を持ち、「制約の中でいかに工夫を生み出すか」ということの、楽しさや喜びにも気づいて欲しいと願っています。

『ことば』（1年）

担当 小坂 諒

秋学期はクロスワードをしていたのですが、ちょうどいい難易度で楽しく遊べるクロスワードはなかなか少ないもので、最近言葉を使った遊びをいくつかしています。

1人が頭の中で例えば「雪だるま」など、どんな物でもいいので答えを決めます。残った人はどんどん質問を出していきます。「それは生き物ですか？」「何色ですか？」「家の中にありますか？」などと質問して行って答えを導きます。誰もがやったことある簡単な遊びですが、これが意外と盛り上がります。大人同士だと楽しくないでしょうが子供とやってみると、大人の方が苦戦してしまいます。他にも、平仮名が1文字ずつ書かれた五十音のカードを作りそれをトランプのように均等に配って、自分の手札の中で何か言葉をできたら捨てる。手札が無くなれば勝ちです。もちろん終盤は言葉がつかれなくなるので、1回パスと引き換えにカードを1枚追加できます。机の上だと手札を広げて考えるスペースが少ないので、いつも机は出さず床で遊んでいます。

まだまだ言葉を使った遊びはいろいろありそうなので、たくさん遊びと言葉を覚えてもらいたいです。

『ことば』（2年）『ことば』（2～4年）

担当 福西 亮馬

2～4年クラスでは、百人一首をしています。一年前に比べると、生徒たちはうんと強くなりました。初めの頃、私は生徒全員を相手にしても負けなかったのですが、今では立場逆転、私一人ではもう生徒たちになかなかありません。この間は源平戦で勝負しましたが、生徒二人対私とで80対20でした。生徒たちの圧勝です。（本当は50枚取った時点で終わりなのですが、生徒たちが「まだ！」と言うので続けた結果です）。お気に入りの札が取れた時は、生徒たちは本当に嬉しいようです。また、大山札は普通の札と違う読み方をしなければならないことなど、私の方がむしろ生徒たちから教わるケースも出てきました。自分から欲した知識は定着度も違います。そのように興味を維持し続けていることには、次々といいことがあるようです。「継続は力なり」というのは本当だと思います。私も嬉しいです。

2年クラスでは、最近までマンツーマンで漢字の調べ学習をしてきました。R君は『下村式 唱えておぼえる漢字の本』がお気に入りです。その本で調べたことを書いた画用紙を、山の学校の壁に一枚ずつ貼り出しています。この間、天井近くの四方の壁が埋まりました。目次を入れて三十五枚ありました。漢字の取り組みである一方で、R君が書きながら「こうしよう」「ああしよう」と発する言葉から、R君の考えに触れることがあります。たとえば注意事項に凝っている時には、『牛』→牛みたいにならないようにしましょう』『干』は、1かくめが千みたいにならないようにちゅういなど、どのように表現すればそれが伝わるかを二人で相談しながら書きました。また漢字のイメージを漫画にするなど、その都度R君がアイデアを言い、私がそれをレポートするような時間が流れています。一方、学期の途中から参加されたT君は、ことわざに興味があります。漢字とことわざ。お互いに刺激が得られればと思います。本読みでは、一回ずつ読みきりにできる昔話を音読してもらっています。雪の日は『鶴の恩返し』、節分では『一寸法師』というように、折に触れ、季節と日本語との呼応をできるだけ深く味わってもらおうと思っています。会話文にも気持ちを込めて読んでくれているこの頃です。



『かず』(1年) 『かず』(2年A) 『かず』(5~6年) 担当 福西 亮馬

1年生のクラスでは、20までの数の計算、文章題、パズルをしています。文章題は、「文章を正しく読む」ことが基本です。「正しく」には「すらすら」という意味も含まれます。読むことに時間がかかりすぎると、文意が取れなくなってしまうからです。1年生の間は、まだこの点が当たり前ではありませんが、それは繰り返し読むことで解決します。そして文意が取れてからそのイメージを式に落とし込みます。ここで、式を先に書いてから文章を当てはめないように気を付けます。パズルは、間違いさがしのほかに、algo や最短経路問題を取りあげました。最短経路問題というのは、複数の道順にそれぞれ数字(重み)がついており、どこをどのようにたどればその合計が少なくすむかということを考えます。いわば計算でたどる迷路です。より良い答えを見つけ出すために、何度も足し算をしてもらいました。唯一最適な答えが見つかった時はうれしく、それまでの苦労は一気に吹き飛びます。考えることに対して、面倒くさいというイメージが増えるよりも、考えるといいことがあるという経験を増やして、2年生に上がってほしいと思っています。

2年生のクラスでは、おりがみで多面体をよく組み立てました。立体幾何には強くなってほしいと思います。生徒は何でも「やればできる」と思ってくれているようで、色々な切り口にもねばり強く取り組んでくれています。最近では十分に解きごたえのあるパズルを毎週1題ずつ出題しています。9マスのナンバープレイス(ナンプレ)を2週にわたって考えたこともありました。「こうだからこう」「まだこの可能性も残っている」と、日々、論理的思考に鋭くなってきています。時には生徒から授業の内容を提示されることもあります。この間は、生徒が自分でJAXAに出したという手紙を見せてもらいました。「なぜ人工えいせいまわりのまわりは金なのですか？ またほかの色でもいいのですか？」と。その返事がJAXAから届いたというので、私も興味を持ってそれを音読させてもらいました。好奇心をもってアクションを起こすことは、何よりも大事ですね。

5~6年生のクラスでは、論理パズルのほかに、数学的なトピックを1時間かけて考察しています。以前は素因数分解を、最近では確率を取りあげました。確率は、単元的に言うとき大きな数と分数との接点にあたります。さて確率のランダムウォークという問題では、偶数が出たら左、奇数が出たら右という出来事を7回繰り返すことを1回の試行とし、100回近くの結果を協力して表にまとめました。その背景に2のべき乗という大きな数が隠れていることを見ました。そして試行回数を増やせば増やすほど、グラフの形状が三角から釣鐘になっていくことを確認しました。また同じく確率の問題から、「モンティ・ホール問題」というものを取りあげました。生徒たちは「なんで？」「なんで？」と素直な驚きを表してくれました。

『かず』(2年B) 『かず』(3年) 担当 吉川 弘晃

2年生と3年生の「かず」クラスは、秋学期の途中から、生徒がそれぞれ一人ずつとなり、以前と比べると寂しくはなったものの、一対一でじっくりと「かず」の単純さや難しさ、不思議さや厳しさ、そして何よりも楽しさに対して、ゆっくりと向き合っている場になったので、改めて新鮮な気持ちで毎回、授業に取り組んでいます。

両クラス共に、原則としては毎回用意するプリントを生徒さんに解いてもらい、分からなかったところを一緒に考えていくという、極めてシンプルな方法をとっています。今学期で扱ったテーマは大きく分けると、①単位(長さ・重さ・水量・距離・時間)、②図形(四角形・三角形)、③掛け算と割り算の文章題です。

3つの課題のうち、①については、ものの多さを数を使って判断する、という社会生活で最も必要なスキルに関わるため、特に力を入れて学んでいます。センチやグラム、リットルといった単位を日常生活の様々な場面に当てはめて考えてみるのは勿論のこと、授業で大事にしているのは算数に登場する言葉の定義を何度も繰り返して確認していくのです。1リットル=1000ミリリットル、1メートル=100センチメートルというに単純なものだけでなく、例えば「距離」と「道程」は意味がどのように異なるのか、絵で示すならどのようになるか、絵を使わずに小さな子供に説明するならどう言えばよいか、といったことを生徒さんと一緒に考えていきます。すなわち、「かず」は数字の世界で完結するのではなく、人間社会の中に息づいている以上、身の回りにある一つの「ことば」として感じるものが何よりも大事なのです。

「ことば」の要素がより重要性を帯びてくるのは③です。小学校2~3年生で求められる基本的な文章題のレベルは、掛け算や割り算の作業を一度行うだけで済むものが多いですが、教室では作業が2~3回必要なものを選んでやっています。そこでは足し算と割り算、掛け算と引き算の両方の作業が必要だったり、自分で図を書いて考える作業が必要だったりします。前者では、「かず」に限らず、複雑そうに見える物事を簡単な複数のパーツに分け、ゆっくりと順番に考えていく忍耐力、そして後者では、文字や数字で書かれていることを具体的なイメージに変えて考える想像力を養うことを目的にしています。最初は混乱したり、面倒くさそうにしていた生徒さんも、似たような問題を何度も一緒に考えることで少しずつこうした力がついてきているように思います。

このクラスには中学1年生が2人、2年生が1人通ってきてくれています。1年生はコンパスを使った作図や、点対称や線対称といった図形の問題をしています。一方、分数の混ざった文字式の変形や、濃度の文章題での式の立て方など、勘違いしやすいところは、折を見て復習をしています。

2年生は、学校の方で三平方の定理や二次関数の最小値問題、三角形の五心など、かなり先取りしている範囲に一度ストップをかけ、基本問題に立ち返って復習しています。一次関数、平方根の計算、角度の計算など、得意なものを足掛かりにして、自信を維持していければと思います。

生徒たちは、それぞれ自分の課題を見据えて、「今日はこれをする」と決めた内容に時間いっぱいに取り組んでいます。その姿勢を崩さないことを大事にして、日々のペース作りにもフィードバックしてもらえたらと思います。

『ことば』(4~6年) 山の学校ゼミ 『倫理』 『調査研究』

担当 浅野 直樹

聞き、話し、読み、書くという活動を総合的に実践しています。

ことば4年クラスの冒頭で行っている、ことばに関するちょっとした問題のプリントをするときでも、この4つの活動をしています。プリントに書かれた指示を読み、それに対して書くというのが基本です。よくわからなければ私に話しかけて質問をして、その返答を聞いて考えることとなります。少人数のクラスであるため、自然とそのように気軽に質問をする空気になります。

作文を書いてもらうときも同様で、まずは普通に書いてもらってから、声に出して読んでもらい、その後に質疑応答をします。ある生徒が釣りの話を書いていて、私は釣りに疎いのでよくわからなかった部分を素朴に質問したところ、ホワイトボードに図をかきながら非常に詳細な説明をしてくれたことがよく印象に残っています。

山の学校ゼミクラスでは、主に「倫理」のほうで聞いて読むというインプットを、「調査研究」のほうで話して書くというアウトプットのほうをしています。大学のレポートなども含めて、受講生はアウトプットをする機会がたくさんあり、しかも伝えたい内容も豊富なのですが、うまく伝えられなくてもどかしいと感じることも多いようです。そういうときは「倫理」で取り上げるような代表的な議論をインプットして、そこにつなげるようにすると伝わりやすくなります。

聞き、話し、読み、書くという活動がそれぞれ有機的に刺激し合うことを期待しています。

『かず』(4年) 『中学・高校数学』A 『高校数学』 担当 浅野 直樹

公式などを丸暗記するのではなく、身体的なレベルで深く理解するということを目指しています。今回は数列を例にとります。

$1 + 2 + 3 + \dots + 98 + 99 + 100$ を求めよ。

初項が a 、公差が d 、項数が n の等差数列の和 S_n は、 $S_n = \frac{n\{2a + (n-1)d\}}{2}$ で求められるという公式を機械的に当てはめて $S_{100} = \frac{100\{2-1+99-1\}}{2} = 5050$ と計算することもできますが、これでは意味がよくわかりません。

ガウスが小学生のときに示したと言われる方法で身体的に理解しながら計算してみましょう。

求める数を S とおきます。

$$S = 1 + 2 + 3 + \dots + 98 + 99 + 100$$

足し算はどの順番で足してもよいので、逆から足してみます。

$$S = 100 + 99 + 98 + \dots + 3 + 2 + 1$$

これらを縦に足します。

$$2S = 101 + 101 + 101 + \dots + 101 + 101 + 101$$

$$2S = 101 \times 100$$

$$S = 5050$$

これですっきり理解できました。

$1 + 2 + 4 + \dots + 256 + 512 + 1024$ を求めよ。

初項が a 、公比が r 、項数が n の等比数列の和 S_n は、 $S_n = \frac{a(1-r^n)}{1-r}$ ($r \neq 1$) で求められるという公式を機械的に当てはめて $S_n = \frac{1(1-2^{11})}{1-2} = \frac{-2047}{-1} = 2047$ と計算することもできますが、これでは意味がよくわかりません。

これも視覚的に理解してみましょう。

求める数を S とおきます。

$$S = 1 + 2 + 4 + 8 + 16 + 32 + 64 + 128 + 256 + 512 + 1024$$

これを 2 倍してみましょう。

$$2S = 2 + 4 + 8 + 16 + 32 + 64 + 128 + 256 + 512 + 1024 + 2048$$

下の式から上の式を引きます。

$$2S = 2 + 4 + 8 + 16 + 32 + 64 + 128 + 256 + 512 + 1024 + 2048$$

$$\rightarrow S = 1 + 2 + 4 + 8 + 16 + 32 + 64 + 128 + 256 + 512 + 1024$$

上の式の右辺を右に 1 つずらします。

$$2S = \quad 2 + 4 + 8 + 16 + 32 + 64 + 128 + 256 + 512 + 1024 + 2048$$

$$\rightarrow S = 1 + 2 + 4 + 8 + 16 + 32 + 64 + 128 + 256 + 512 + 1024$$

$$S = 2048 - 1$$

$$S = 2047$$

このように 1 つ右にずらして引くことで、最初と最後だけが残って間が全部消えるのがポイントです。

『中学数学』

担当 吉川 弘晃

現在、「中学数学」クラスは 1 年生と 3 年生の生徒さんを 1 人ずつ抱えています。前学期までと同様、生徒さんのレベルに応じて講師が用意した問題を解いてもらい、分からない問題については詳しい解説を行うという形式をとっています。

秋学期は中学での学習分野が共に、図形の箇所が中心となりました。同じ図形分野でも前者は直線や扇形といった図形の基本的定義や作図、求積問題を扱うのに対して、後者は、相似や合同、その他様々な定理を用いた問題を扱っています。当然ながら、中学 3 年ともなれば、1～2 年生でやった図形のいろはから、角度の求め方、さらには方程式などの分野が総合された問題を考えることとなりますが、大事な部分は中学 1 年生と同じであると思います。それはすなわち、「自分が紙の上に一旦、書いたものを解答が終わるまで常に意識し続けること」です。

中学 1 年であれば、直線や線分、扇形、垂直二等分線といった数学の専門用語を一つひとつ確認して身に付けるのが学習の重心になりますが、こうした用語をまずは、自分の言葉で同級生に説明できるか、そして小学 1 年生に説明できるか、この 2 点をノートを見ながらでもいいので考えてみましょう。そうすると、自分が白い紙の上に書いているものが、本来であれば直線ではないということ、コンパスは（単なる円を描く道具ではなく）長さを測る道具であるということ、こうしたことが作図を繰り返しているうちに身体に染み付いていくでしょう。

数学的概念が数多く出てくるようになる中学 3 年では、以上のような確認作業は一段と重要になります。図形に一本補助線を描く際も、どのように引くか、新たに出来た交点を何と名付けるか、そもそも求めねばならない対象は何か、といった点に常に注意せねばなりません。一方、スピードが求められるような試験の場合、以上の順次的な思考だけでなく、この 2 つの三角形は合同、あるいは相似ではないか？というような直感に基づいた仮定の上で、それにつながるように解答や証明を試みるのも一つの考え方です。もっとも、こうした直感的思考は数多くの問題パターンを経験しなければ働かないのが事実である以上、大事なのは授業や教室で自力で解けなかった問題をもう一度、時間をおいてやってみる、同じ問題をやるのが嫌であれば、別のやり方を考えてみることでしょう。

『中学英語』（1年）『中学英語』（2年）『高校英語』（2年）

担当 吉川 弘晃

一つの言語を学ぶことは一つの世界を知ることでもあります。さらに、英語やラテン語、古典ギリシア語、漢文といった特定の地域や民族の枠を越えて広く流通する言語の場合、その学びは一つの世界にとどまらないアクセスを与えてくれます。今や、英語が出来れば世界狭しと活躍できることは確かですし、ラテン語が出来れば古代～近世のヨーロッパの知識人も時代を越えて対話することが出来るでしょう。

しかしながら、いかにコミュニケーションの道具が優れていたとしても、伝える内容が普遍的だったり興味深いものでなくては、言葉はメディアとしての役割を發揮できません。英語を学ぶ際にもまた然りです。中学1年のクラスでは、名詞や動詞、形容詞といった文章を読むための基礎を確認しながら、「イソップ寓話」をテキストにして音読を行っています。まだまだ分からない単語も多く、動詞の不規則変化や未知の文法事項に驚きつつも、生徒さんは寓話のストーリーと繰り返しの音読をもって、英語の表現に親しんでいるように思われます。細かい日本語の意味を理解してもらうだけでなく、文章のつながり（接続詞）やストーリー展開の決まりごと（起承転結）などを意識してもらうことで、広い意味での国語力を早いうちから身につけてもらうのも大きな課題の一つです。

英語がグローバル言語としての地位を獲得して以来、英語ができれば地球上のあらゆる人々とコミュニケーション可能になるかのような言説が溢れていますが、他方で英語もまたヨーロッパの西端の一地域から始まった言語であることを忘れてはいけません。私たちが当たり前のように習う文法や単語の一つひとつは1000年以上かけて、現地の人々が日々の生活の中で少しずつ育んで変化させていったものであり、言うなれば、その土地の歴史の玉手箱なのです。中学2年生のクラスでは、ブリテン島の歴史について簡単な英語で書かれた本を、去年度から一緒に読み進めています。以前は南側イングランドのアーサー王伝説の本を読破したのに対して、今回は北側スコットランドのウィリアム・ウォレスという英雄を扱った本を読んでいます。以前のもの比べて文法や単語のレベルが上がっているのに加え、13世紀のブリテン島及びフランスの国際関係や、中世ヨーロッパの習俗、軍事史的背景など様々な知識が必要になるので一筋縄ではいきません。それにもかかわらず、生徒さんは歴史への興味をバネに、しっかりと取り組んでいます。

さて、英語が読めるということは書けるということでもあります。なぜなら、外国語の構造的な理解はそれが瞬間的に頭から出てくるようになって初めて成し遂げられるからです。高校2年生のクラスでは、基本的な文法問題や英作文を生徒さんと一緒に解いていきます。ただ正解するのではなく、この箇所は文全体に対してどういう意味を持つかといった問題、一つの単語でも名詞と形容詞で使うときはどう違うかといった問題、を一緒に考えていくことで、自分が触れている単語や文法一つひとつの理解に対して意識的になってもらうことを目標としています。

『英語講読』 C (John Dewey, *Essays in Experimental Logic*)

『高校英語』（3年）『英語文法』『中学英語』（2～3年）

『高校英語』（1年）『中学英語』

担当 浅野 直樹

語源的に考えられるようになるとよいと感じることが多いです。

中学も3年生くらいになると語源的に考えることのできる語が多く登場します。京都市で使われている検定教科書をぱっと見ただけでも、dis (反対) + cover (カバー) → discover (発見する)、in (否定) + cred (信じる) + ibl [ible] (可能) + y [ly] (副詞) → incredibly (信じられないほど) などが目につきます。語源的に考えれば、綴りを間違っても減ります。

高校生ともなると語源的に考えることのできる語が爆発的に増えます。大学入試で読むような堅い文章だとなおさらです。2016年のセンター試験第6問から抜粋すると、com (共に) + pose (置く) → compose (構成する)、con (共に) + tract (引く) → contract ([お互いに引っ張り合う] 契約)、in (中に) + flu (流れる) + ence (名詞) → influence ([中に流れ込む] 影響) などです。influence は influenza (インフルエンザ) と同語源です。

大人の英語文法クラスでも語源が威力を發揮しています。そのクラスで取り上げた例を少し紹介すると、com (共に) + passion (感情) → compassion (共感)、at [ad] (向かって) + tract (引く) + ion (名詞) → attraction (引きつけるもの、魅力) です。

John Dewey の *Essays in Experimental Logic* のように難しい文章を読む際にも語源は役立ちます。この本では idea, reflection, notion などの似たような意味の語が使い分けられています。idea はプラトンのアイデアでもあり、想像上の、場合によっては理想的な観念を指します。reflection は re (後ろ) + flect (曲げる) + ion (名詞) と分解できるので、反省して熟考すること、notion は note (気づく、注目する) の名詞形なので、着想といったところでしょうか。

語源的に考えることは、漢字をへんとつくり分解するようなものであって、語呂合わせよりはるかに正当な根拠があるので、おすすめです。

山の学校ゼミ 『社会』

担当 中島啓勝

数期にわたって四名の生徒さんたちと一緒に勉強してきたこの授業ですが、海外についての情報や課題図書から学んだ知識がかなり蓄積されてくるにつれ、現代社会についての問題意識がかなり高度なレベルで共有されてきたように思います。お互い手探りで学んでいる頃とはまた違う形で、よりディープな議論を展開できるようになってきました。しかし、僕たちなりに理解が深まれば深まるほど、これから世界で起こりそうなことの複雑さが痛感されます。知れば知るほど、世界がとてつもなくややこしい方向へと進んでいるように思えて仕方ないのです。

以前からこの授業では、「民主主義」や「資本主義」が大きな岐路に立たされているという認識に基づいて展開してきたわけですが、去年 2015 年ほどこの二つが危機にさらされているという事実が露呈した年はなかったのではないのでしょうか。シャルリ・エブド事件から始まりパリ同時多発テロに終わる、という悲劇的な一年となったフランスを中心に、終わらない経済危機に苦しむギリシャ、難民受け入れによって揺れる東欧やドイツ、そもそも難民問題の元凶であるシリア・イラクにおけるいわゆる「イスラム国」を中心とした動乱、経済成長にブレーキがかかり始めた中国とそのあおりを受ける新興国、歯止めの利かない原油安によって不安定になる世界中の資源大国、そして安保法制問題によって遂に「戦後の終わり」が現実になりつつある日本……。そして、この流れは去年だけの単発的な現象などではありません。今年も、そしておそらく来年も、こうした混沌に満ちた状況は続くと思えます。

世界中の人々にとって今年最も注目されるイベントの一つが、11 月に決着するアメリカ大統領選であることは間違いありません。しかし、この大統領選が示しているのはアメリカ社会全体の分断、共和党と民主党それぞれの深刻な内部分裂、そして既存政党やエスタブリッシュメントと呼ばれる伝統的支配層に対する幻滅です。今までのアメリカ政治では考えられなかったような候補の躍進はその確かな証拠だと言えるでしょう。そして、どの候補が最終的に大統領になるにせよ、規定路線化していると考えられるのが新政権の更なる内政重視姿勢、つまりアメリカが他の世界へ関与することに消極的になる、という方向性です。これはアメリカの覇権をよく思わない人にはいいことのようにも聞こえますが、逆に言えば先ほどから説明している世界情勢の混乱を抑制するパワーも弱まることを意味しています。「内向き」になるアメリカが一体どのような影響を及ぼすのか、この授業では注意深く観察していく予定です。

これにも関連して、課題図書としては阿川尚之『憲法で読むアメリカ史(全)』(ちくま学芸文庫)を読んでいます。「アメリカ」と「憲法」、この二つが今の僕たちにとって大きなキーワードなのではないでしょうか。



『イタリア語講読』

担当 柱本 元彦

『カルヴィーノによるアリオストの狂えるオルランド』を読んでいます。カルヴィーノの解説をはさみながら最初の内はアリオストの文章も飛ばすところなく続いています。序文にあるのは『狂えるオルランド』第一歌の五分の一ほどですが、これだけでも全体の雰囲気はおおよそ掴めるでしょう。この序文の最終節は、アリオストの詩法、オッターヴァの解説で締めくくられることとなります。とりあえずはここまでにして、春学期からはもう少し易しいテキストに変更する予定です。イタリア語講読は五年ほど前、まるで勉強会のように二人ではじめたわけですが、その相棒広川先生の都合が悪くなり、とうとう離脱されることになりました。広川先生のイタリア語能力はすでに講師を凌ぐものがあり、わたしも長年イタリア語を教えています、これほど勉強になった授業はありませんでした。なかでも一年かけて精読したダンテの『新生』は生涯記憶に残ることでしょう。ラテン語を学習する必要性を改めて認識することにもなりました。そのうちにそのうちと言ってこれを先延ばしにしているのはわたしの怠慢以外の何ものでもありませんが、本当にそのうちに広川先生のラテン語授業に参加したいと考えておりますので、よろしく願いいたします。何だか内輪の報告になりますが、講師を含めて現在二名のイタリア語講読、春学期から受講生を増やしたいと思います（思うだけでは話になりませんが実は今まで本気で思いはしませんでした）。

『ロシア語講読』

担当 山下 大吾

引き続きチェーホフの短編に取り組んでおります。前号の「山びこ通信」で講読予定とお伝えした『イオーヌィチ』を読み終え、現在は『中二階のある家』を読み進めているところです。受講生は変わらず T さん、N さんのお二方、毎週綿密な下調べをされた上で授業に臨まれています。チェーホフを読み始めてから早くも一年が経とうとしておりますが、その間に彼独特のスタイルにも大分慣れ親しまれた様子がうかがわれます。授業中はもちろんのこと、授業後も作品やロシア語についての話が尽きず、楽しい対話が繰り広げられる昼下がりのひと時となっております。

『イオーヌィチ』はこの短編の主人公の父称がそのままタイトルとなったものです。おおよそ名作、古典と言われる作品を、その作品世界に浸ることなしに、あらすじや大体の枠組みのみで理解しようとするほど愚かなことはないかもしれませんが、それはさておき、この作品では主人公イオーヌィチがある娘に恋をするが結局実らず、その後事態が反転し、その娘がイオーヌィチに恋をしてやはり実らないという構図が見て取れます。これはまさしくプーシキンの代表作『エヴゲーニイ・オネーギン』で繰り広げられるオネーギンとターニャとの関係を、鏡写しのように反転したものにほかならず、その点でこの短編はロシア文学随一の名作のパロディと言って差し支えないものとなりましょう。そう言えばプーシキンのタイトルには、同じ主人公の名前でも名と姓だけで父称がありません。父称のみのタイトルは、遊び心の潜む、チェーホフからプーシキンに捧げられたオマージュと言えそうです。



Aのクラスは、昨年6月から読み始めたル・クレジオの『アフリカのひと L' africain』を読み終えました。ポケット版で120頁ほどの小著で1頁あたりの単語数も少ないとはいえ、一回二コマの授業で毎回7～8頁ずつ読み進めることができ、8ヶ月ほどでの読了となります。舞台がアフリカということもあり見慣れない単語も出てきますが、全体的には読みやすい部類に入ると思います。フランス語の文法を一通り終えた人にもお勧めです。

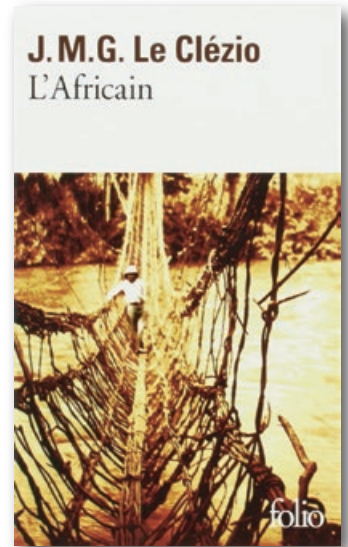
戦争によって父と離れて育ったル・クレジオは、8歳の時にアフリカで父とともに暮らし始めます。しかし、そこで出会った父は、ル・クレジオがフランスで見知っていた人たちとは根本的に違っていました。気難しく、厳格で、さまざまな規則を作って生活を律し、衛生に異常なまでに気を使うが、アフリカ人に対しては優しい。ル・クレジオはそんな父を、戦争前に父が母とすごした幸福な時代と対比することでより鮮明に描いています。若く、冒険心と愛情に満ちた若者だった父が、権威的で怒りっぽく、また厭世的で孤独な人間になってしまうさまを、戦前と戦後を対比させることで浮かび上がらせているのです。とはいえ、あたかも伝記であるかのようなこのエッセイも小説家ル・クレジオが描いた世界であり、一見ルポルタージュのようでありながら、手元に残っている写真や生前に聞いた話、ル・クレジオが受けたそのときどきの印象から作りだされたものであることも忘れてはならないでしょう。『アフリカのひと』においては、事実とフィクションが互いに混ざり合い、ひとつの世界を作りだしています。自伝的エッセイのようでありつつも、それにとどまらない拡がりを感じてくれるのは、やはり文学者のなせるわざではないでしょうか。

今後は、ジャン＝ポール・サルトルの文学論集『シチュアション』から、アルベール・カミュの『異邦人』についての文章を読む予定です。

Bのクラスは、引き続きデカルトの『方法序説』を丹念に読み進めています。とはいえ最終部である第6部に入り、終わりもみえてきました。春学期での読了を目標に、しかし焦ることなく読み進めていきたいと思えます。

内容的には、心臓についての記述から、動物精気の話、人間と動物の違いについてなど、やや込み入った話が多くでてきました。動物精気 (esprits animaux) とは、非常に微細な血液のようなものであり、例えば腕を上げようと思うと腕が上がるのは、この動物精気が腕に流れるからだとしてデカルトは考えています。したがって、動物精気は精神と身体を結ぶ媒介の役割を果たします。しかしこの動物精気や精神と身体の問題は、その説明の曖昧さからデカルトの弱点とも言われます。精神がいかんにして身体に働きかけ、また身体からの影響を受けるのか。これはデカルト以降、西洋哲学の大問題となるものです。

もうひとつの人間と動物の違いに関しては、デカルトは人間と動物の違いを、言語を用いることができるかどうか、多種多様な状況に対応できるかどうか、というふたつの基準に求めています。動物でも、たとえばオウムは音声を発することができるし、蜂は人間にはできないような幾何学的な巣を正確に作ります。しかし、動物は人間のように言葉を組み合わせる話をしたり、ひとつの技術を他のことに応用したりということができません。デカルトはこの違いを、理性を持っているかどうかの違いであると考えます。デカルトにしたがうならば、人間は理性を持っているからこそ互いにコミュニケーションをとることができるのであり、状況に応じて振る舞いを変えることができるのです。しかし逆に言えば、デカルトにとっては人間だけが理性すなわち精神を持ち、動物は機械と同じものにすぎません。昨年はソフトバンク社から話すロボット、ペッパーが発売され話題となりましたが、現在の人工知能やコンピューターの発達にデカルト的な人間と動物、人間と機械という区別を乗り越えることができるのでしょうか。これはまだ分かりませんが、ロボットが人間と同じように会話をし、状況に応じた対応ができるようになったなら、今度は人間とは何かという問いに対し、デカルトとは異なる答えが求められることになるでしょう。



今学期は前学期まで開講されていた土曜午前の文法クラスが、時間割もそのまま講読Cクラスに「昇格」致しました。その結果講読クラスのみ4つという贅沢なスケジュールとなっておりますが、各々受講生は一方のみです。いずれも文法を一通り終えられた方でしたら受講可能ですので、興味を持たれた方は是非ご連絡ください。

Aクラスではキケローの『アルキアース弁護』の読了が間近となってきました。弁論の始めて繰り返された、人間の叡智に関わるあらゆる営みを支え結びつけるキーワードである *humanitas* を、キケローは詩人を弁護する最後の段階で改めて切り札として用いています。なおこの授業では受講生Aさんのご希望もあり、文法の復習も合わせて行っております。

Bクラスは前学期途中から取り組み始めたホラーティウスの『諷刺詩』を講読中です。諷刺というジャンルの性質上、先の『書簡詩』とは些か趣の異なるスタイルとなり、彼の代名詞とも言える *aurea mediocritas* 「黄金の中庸」から少しく脇にそれ、その筆鋒も度が過ぎる場合がまま見られるようです。このようなテキストを初歩の段階で教授する際の古典学の大胆な対処法も含め、Caさんはそれらを鷹揚に楽しんでおられる様子です。

Cクラスではキケローの『老年について』を冒頭から読み始め、現在6節まで進みました。Cuさんは文法を終えられたばかりですが基本に忠実、文字通り一語一語の解説を心掛けておられるばかりでなく、註釈にも丁寧に目を通され、毎回充実したノートを作成されています。26節の「日々何かを学び加えながら老いていく」という賢人ソローンの言葉に触れるその時が今から楽しみです。

Dクラスではおよそ2年かけて取り組んできたキケローの『友情について』を読了し、現在はCiさんご自身のご関心もあり『トゥスクルム荘対談集』を読み進めています。古典文学史などで必ず取り上げられる、ラテン文学やローマ世界を支える重要な理念の結晶の一つ *virtus* 「美德」。『友情について』の最終部で二人の若者を前にその価値を讃えるラエリウスの言葉は、この作品脱稿後まもなくして迎えることになる悲劇的な人生の結末も相まって、キケローその人の白鳥の歌として、不滅の輝きを放ちつつ読む者の胸に響き渡ります。

『ラテン語初級』 A・B 『ラテン語初中級』 『ラテン語中級』

『ラテン語上級』

担当 広川 直幸

ラテン語初級Aでは、Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana* を教科書に、ラテン語の初歩を学んできました。かなり時間がかかったが、今学期でめでたく教科書は終了である。その後は簡単な読み物（おそらく抜粋集）を用いて本格的な原典講読に備える予定である。初歩を一通り学んだことがあれば参加可能なので気軽に問い合わせいただきたい。

新規開講したラテン語初級Bでは、Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana* と、その練習問題集 *Exercitia Latina* を用いてラテン語を学び始めた。Ørbergの教科書を用いる授業は今までに何度か開講したが、*Exercitia* を授業中に全て解くのは初めてである。受講生の飲み込みがとてよいので、今のところ結構なスピードで進んでいる。段々と難しくなるので、適度に速度を調節しながら進めようと思っている。

ラテン語初中級では、カエサル『ガリア戦記』を講読している。受講生はインターネット上の PHI Latin Texts 所収の旧トイプナー版(O. Seel校訂)を用い、私はW. Hering校訂の現トイプナー版を用いている。細かい部分が意外と違うのが面白い。今学期は第2巻を最後まで読む予定である。受講生も私も段々気に入ってきたので、来学期も『ガリア戦記』を読むかもしれない。

ラテン語中級では、タキトゥスの『アグリコラ伝』を読んでいる。授業指定のテキストと註釈は、2014年に出版された A. J. Woodman, C. S. Kraus, *Tacitus: Agricola* (ケンブリッジの黄色と緑のシリーズ) である。初めは悩まされた独特の文体にもだいが慣れてきた感じがする。相変わらず、一度に進む量は OCT 版 1 ページ程度と少な目ではあるが、来学期の半ばには読み終わると思う。

ラテン語上級では、カトゥッルスを読んでいる。テキストと註釈は学生向けの D. H. Garrison, *The Student's Catullus* を用いて、ゆっくりと進めている。何事もなければ、この先もカトゥッルスを読む予定である。

『ギリシャ語初級』 『ギリシャ語中級』(A・B)

『ギリシャ語上級』

担当 広川直幸

ギリシャ語初級では、Peckett & Munday, *Thrasymachus* を用いて古典ギリシャ語の初歩を学んでいる。2月4日の授業で第23課の途中まで進んだ。「語彙集のみを頼りに本文読解をしてもらった後で初めて解説をして練習問題に進む」という基本方針は変えていない。このやり方だときちんと文法を学んでいないという不安が残るかもしれないが、それは杞憂である。各課の練習問題(本文に基づく英文希訳)が解けるということは文法も分かっているということ意味している。それでも分からないところがあるならば、本文を読み直して自分で規則をまとめてみるのがよい。そのほうが、初めに文法ありきで学ぶよりも、はるかに現実的でなおかつ面白いと思う。

ギリシャ語中級 A では、アリストテレスの『詩学』を読んでいる。テキストは、L. Tarán, D. Gutas, *Aristotle: Poetics*. Leiden: Brill, 2012、註釈は、D. W. Lucas, *Aristotle: Poetics*. Oxford UP, 1968 を用いている。写本伝承も悪く、内容も難解なテキストなので、文字通りうんうん唸りながら読み進めている。それだけならば、骨折り損のくたびれ儲け、こんなテキストを選んで後悔先に立たずとなっていたのだが、じっくり原典を読んでみると、予想していた以上に面白い。ヨーロッパの思想というのは実にアリストテレス的なのだということを実際の文言として発見することができる。こういう発見を大切にしながら、じっくり読み進めていきたい。

ギリシャ語中級 B では、アリストパネースの『雲』を読んでいる。Wilson 校訂の新しい OCT と K. J. Dover, *Aristophanes: Clouds*. Oxford UP, 1968 を用いている。Dover の註釈はかなり専門的なので、もっとやさしい註釈書が欲しいところだが、ないので仕方がない。Sommerstein や Henderson の対訳本を読んだから、Dover の註に進むのがよいかもしれない。『雲』はこの授業で読む初めての韻文作品ということもあり、まだ韻律分析を重点的に行っている。月に2回の授業では、授業中に十分に音読練習をすることはできない。毎日10分でもよいので、既読部分を「声に出して読む」練習をしてもらいたい。

ギリシャ語上級では、引き続きアイスキュロスの『テーバイ攻めの七将』を読んでいる。今学期で読み終わることができるかもしれない。だが、どうも後半部分には単純な interpolation 以外にも厄介な問題が潜んでいるようで、なかなか思ったようには進まない。きちんとデータを取っているわけではないので、主観的な物言いになるが、800行に入るあたりからギリシャ語がおかしい感じがする。アイスキュロスのギリシャ語は「日常言語に加えられた組織的暴力」という詩的言語の定義を体現しているようなもので、そもそも変なのだが、それとは違うベクトルのおかしさを感じる。

『新約ギリシャ語初級』

担当 堀川 宏

このクラスでは現在、『マタイによる福音書』をゆっくり読み進めています。ギリシャ語原文が持つ表現上の特徴を確認しつつ、翻訳では消えてしまいがちなニュアンスを汲み取るように努めながら進んで、ようやく第 7 章に入りました（2 月上旬現在）。語順による意味の力点の調整や、人称代名詞の主格形が明示されることによる対比の効果など、原文を味読する楽しみを存分に味わっています。

新約聖書は言うまでもなくキリスト教の聖典であり、そこには教義上の問題などもあるでしょう。しかしそれらをひとまず置いて、古代に書かれたひとつのギリシャ語テキストとして聖書を見るとき、当然のことながら、そこには書き手による表現上の工夫が溢れています。書き手が施したその工夫にしっかり反応しつつ、抽象的な教義や思想からテキストを解釈するのではなく、テキストから意味が立ち上がってくるような読み方を、この授業では心がけようと思っています。

『ロボット工作』

担当 小坂 諒



秋学期は、加速度センサーの基本的な使い方をサーボモーターを使いながら学びました。今学期からはその応用ということで、加速度センサーの傾きに応じて、DC モーターを制御するロボットを作っています。つまり加速度センサーがロボットのコントローラーで、それを前に傾けると前進し、右に傾けると右に旋回するようなロボットです。まずは、ブレッドボード使った躯体をみんなで作り、それが動くように何度もコードを書き直して、なんとか動くプロトタイプが完成しました。これで、やりたいことは実現できるということがわかったので、次はそれぞれが自分のロボットを作っていきます。ブレッドボードでは場所を取るなので、arduino と同サイズのユニバーサル基板に回路を半田付けしてシールドを作りました。センサーの傾きで動くロボットは完成したのですが、まだまだやれることは多そうです。というのも、現在使っている加速度センサーは xyz の 3 軸の値を読み取りますが、傾きだけを検知するなら xy の 2 軸だけでよく、コードでも z 軸に関して触れていません。つまり、上下にセンサーを振って z 軸も使えば、傾きでロボットを移動させる命令とはまた別の命令をロボットに指示することができます。実際にロボットにどんなことをさせるかは、まだ決まってませんが生徒さんが自分のアイデアを取り入れた自分だけのロボットを完成させて、最後にみんなで遊べたらなと思っています。



10月より席主を務めさせて頂いております中谷勇哉です。

9月より結果的に4ヶ月続いたトーナメントが終了し、最初はあたふたすることも多かったのですが、中務先生はじめ、他の先生方のお力添えもあり、大分慣れてきて、全体を見られるようになってきました。

道場の最初20分ほど行っている将棋講座では、「ちょっと難しいかな」と思う手筋を教えたりしてしまうのですが、その後の対局を覗いてみると、みんなすぐに(しかも適切に!)実践していて、子どもの吸収力に驚かされます。

前任の百木先生も仰っていましたが、小さいうちに将棋を学んでおくことは、礼儀作法や思考力を身につけるうえで非常に有益だと思いますし、私自身もその一助になれるよう努力していきます。よろしくお願いたします。



4年前、「東京に山の学校があればありがたい」というお声をきっかけにラテン語の出張講習会を始めました。予想を超えるお申し込みと受講生の熱気に押される形で、以来月に一度の割合で東京と京都で講習会を行なっています。京都で開くのは、毎週山の学校に通えない方のニーズに応えるためです。

参加者は山の学校と同じく学生、主婦、会社員、教員、退職したシニアなど様々です。「すべての道はラテン語に通ず」と言いたくなるほど、動機こそ違えどもラテン語に対する熱い思いを共有する点でみな同じです。



当初は文法のクラスだけでしたが、今は文法を終えた人のための講読クラスもご用意し、キケローの「スキューピオーの夢」と「アルキアース弁護」を読んでいます。それぞれ1回3時間の授業ですが、文法クラスは6回(合計18時間)で全体の鳥瞰図が得られるように工夫し、文法を一通り終えたら講読クラスで原典講読に挑戦するという流れになっています。

文法のクラスでは原著『しっかり学ぶ初級ラテン語』を教科書に使っています。解答に至るまでの考え方を丁寧に説明しているので一人でも十分学べる内容になっていますが、例文も練習問題も古典作品からの引用が多く含まれるため、しっかり読み込んでいくと訳語の選択に迷う場合も多々出てきます。講習会では、そうした疑問にもお答えするよう心がけ、適宜オリジナルの文脈の解説にも踏み込んでいます。

講読コースの参加者には、事前に原典の一字一句について詳しい語釈を施したオリジナル資料をお渡しし、予習に役立てていただいています。この資料では、et(そして)一つに至るまで個々の単語の意味と文中の役割を詳述してあるので、この資料があれば一人でもキケローの読解に挑戦できる内容になっています。ただしラテン語の常、別解はいくらでもありますので、クラスでは資料に書いた説明と異なる解釈も検討しながら、1度に2節のペースでじっくりと読み進めています。

<日程>

- 2016-03-12 (土)「スキューピオーの夢」(京都)
- 2016-03-26 (土) 文法V / 「アルキアース弁護」(東京)
- 2016-04-17 (日) 文法VI「アルキアース弁護」(東京)
- 2016-04-23 (土)「アルキアース弁護」(京都)

※詳細はホームページを御覧ください。

<http://www.kitashirakawa.jp/taro/>

お申し込み、お問い合わせはお電話またはメールにてどうぞ。

tel: 075-781-3215

email: taro@kitashirakawa.jp



く ● 巻頭文の続き

慣れ親しんだこの言葉を全員で朗読した後、私は子どもたちに次のような話をしました。

「復習することは楽しいですか。家に帰って学校で学んだ事を復習するのは大事です。コツをいいます。六年生は五年生、五年生は四年生の勉強に必ずうっかりしていること、積み残しがあります。二年生は一年生で習ったことをやり直すと『なるほど、そういうことだったのか』とわかることがあるはずですよ。その発見は『よるこばしからずや』です。では尋ねます。一年生は何を復習すればいいのでしょうか。

こう聞くと、みな困った顔をしました。一人の小学一年生が答えました。「幼稚園には教科書はない」と。お見事。その通りです。次に、二年生が答えました。「一年生ですすでに習ったものがある。それをやり直せばいい」。これもその通りです。私は次のように話を続けました。

「今日集まったみなさんは幼稚園時代に何を学びましたか。俳句の時間に園長先生が言ったことを思い出して下さい。『姿勢が大切。小学校に行ってもよい姿勢で学んで下さい』と繰り返し言いましたね。そのことはどうしても忘れがちです。ほかにもたくさんのお話を幼稚園時代には学びました。今できていることもあれば、できていないことや忘れてしまったことがあるかもしれません。そのようなことをもう一度思い出してみして下さい。そして『なるほど、そういうことか』と納得できるなら、それもまた『よるこばしからずや』です。

孔子は学校の勉強を学ぶことだけを『学ぶ』と言ったわけではありません。むしろ、幼稚園時代にみなさんが大切にした優しさや思いやりや勇気の一つ一つを大人にもわかるように説明していると先生は思います。たとえば、みなさんは、手をつないで幼稚園に通いました。年少児が泣いたとき、『だいじょうぶ?』とやさしくしてくれました。そんなみなさんを孔子は『君子なるかな』と言うでしょう。君子とは立派な人という意味です。大人だけが立派だという意味ではありません。今いるみなさんも、良い姿勢で学び、家族や友達を大切に毎日過ごせば、君子と呼ばれるのです。この『論語』という本にはそういう生きる上で大切なことを『思い出す』ヒントがいっぱい書かれています。そしてその大切なことは、幼稚園ですべてみなさんは学んだのです。これからも、がんばって声に出していきましょう。

冒頭の言葉はこれまで何度説明したか、何度声に出したかわかりません。子どもたちの真剣な姿勢と表情が、この日は上のような話を導いたと感じています。私にとっても、素読の時間は新鮮な言葉との出会いの場になっています。(山下太郎)

2016年4月開講 新クラス会員募集。

小学生『歴史』クラス

毎週木曜 17:30～18:30 (予定)

講師：吉川 弘晃

(京都大学文学部西洋史学専修
山の学校講師)

「日本では小学生から日本の歴史(社会)を学びますが、歴史とはどの科目にもまして不思議と楽しさにあふれる学びです。なぜなら、過去に起きた

人間に関わるあらゆるものを物語の形にして自由に考えられるからです。

しかし、「自由」といっても、一つだけ重要なルールがあります。それは、物語の一つひとつに証拠を示して相手に理解してもらうことです。クラスでは、日本の歴史を理解するうえで基本的な道具を、国語や算数、理科の知識を引っ張りながら(歴史は知の総合格闘技です)、楽しんで身に付けていきます。」

——本誌を手にとり下された方へ

山の学校は、小学生から大人を対象とした新しい学びの場です。「Disce libens. (楽しく学べ)」がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです(春学期は6月、秋学期は11月、冬学期は2月)。ホームページでも、クラスの様子やイベント(毎月開催・無料)の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕方がない!もし、そうした気持ちの本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで

TEL: 075-781-3215

FAX: 075-781-6073

E-mail: taro@kitashirakawa.jp

<http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko>

